

こわれものとしての「悲しみ」を粗略に扱わない社会のために 静かに読まれるべき一冊



やいます。「ミシユカノ森」は、元々は、事件の六年後の年
に妹さんのご家族を悼み、悲しみについて思いをはせる会と
なりましたが、その後は、愛する人を失った悲しみを抱える人たちの
声として、様々な活動がなされています。必ずしも犯罪被害
者ではありませんが、僕は何度かご招待いただき、ここ数年、
を通じて、入江さんご本人のみならず、犯罪被害者の方々し
り、多くのことを学びました。

死刑廃止の国際的な趨勢に反し、死刑を存置し続ける日本。支持する声も根強い。しかし、私たちは本当に被害者の複雑な悲しみに向き合っているだろうか。また、加害者への憎悪ばかりが煽られる社会は何かを失っていないだろうか。「生」と「死」をめぐる真摯に創作を続けてきた小説家が自身の体験を交え根源から問う。